

サウダーデの夜

「夕べは、まっことサウダーデの夜じゃったろう、なあ、月田さん」客間に通され、ソファに座って間もなく、堀田氏は、白い髭に包まれた顔に、笑みをたたえ、私の顔を覗き込むようにそう言い放った。日本人の口から「サウダーデ」の言葉を、それも日常会話の中で聞くのは、初めてだった。さすが、天草日本ポルトガル協会の中会長だと思った。髪の毛はすっかり白くなったが、声の張りは、相変わらず堂々としていて気持ちがよい。

夕べは、まさしく「サウダーデ」に浸りながら、一人淋しく生簀の並んだ料理屋のカウンターで飲んでた。10年以上前のことになる。コンサートを終え、たくさんの天草の人たちに囲まれ、にぎやかに酒を酌み交わしたあの日のことを、並んだいくつもの陽気な顔たちを、そのまま眠らずに、釣りに行ったことを、思い出しながら。

九州各地に大雨洪水警報の発令されている最中、熊本から天草へ向かうフェリー乗り場で、堀田氏に電話をした。「もしもし、月田ですけれど、」
「どなた？えっ？月田って？？？何で、この前、こなかったんじゃ？皆、待つとったのに、約束を違えた者とはもう絶交じゃ、と皆、憤慨しとった。」
「これから、フェリーに乗るところなのですが、7月20日にそちらへ伺うとお電話したはずですが……」
「わしらは、6月20日に待つとったんじゃがな」
どうやら、月を勘違いしたらしい。今更、何を言っても遅いのだ。私の心にも大雨洪水警報が発令された。ともかく、ここまで来たからには、島に渡るしかない。それから、謝罪をして廻ろう。腹を決めて天草本渡行きフェリーに乗り込んだ。雨と波が吹きつける船の窓からは、何も見えない。泣きたい気持ちを抑えて、ほとんど客のいない椅子にギターを抱いて横になった。

1時間後、雨の降りしきる船着場に、当然、迎える人はいなかった。

淋しさを紛らわす為、夕方、美味しい魚を求めて、生簀料理屋に飛び込んでみたものの、客は私一人。店の人も、料理を運んできては、調理場に消えてゆく。話し相手もなく、地蛸のてんぷら、かわはぎの薄造り、煮付けを肴に、麦酒と焼酎を飲みながら、「みんなどこへ行ってしまったんだろう？」ひとりサウダーデに浸った。おまけに市町村合併で、本渡市は天草市になり本渡という地名までもなくなっていた。

翌日、朝ご飯を済ませ、朝風呂に入り髪を洗ったところに、堀田氏から、御崎氏も呼んでいるので、すぐに、堀田氏宅へ来るようにとの電話が入った。急いで髪を乾かし、堀田氏宅へ向かった。

その第一声が、その「サウダーデの夜」発言だった。

程なく、御崎氏も到着。お互いの思い込みの結果の行き違いを、今更、蒸し返しても仕方あるまいということで、今回のことは、両

者共、水に流してくれた。仲直りの乾杯をした。私だけ赤ワインで、堀田、御崎氏はお茶で。

御崎氏の計らいで、その晩は、温泉宿に泊まる事になった。夜は、奥方も一緒に食事をする事になった。御崎氏とは、河浦のかつてポルトガルの宣教師によって建てられたというコレジオ（イエズス会の学校）の跡地に、キリスト教布教のための資料館を建設する為に心血を注いでいるまさにその頃、初めてお会いした。十年前、彼は55歳の時だった。丁度、私の今の歳だ。その頃から比べるとかなり風格もまた立派な初老の紳士だ。河浦町にはなくてはならない存在のようで、教育委員会を退職した今も、忙しく活動しているらしい。彼も、一ヶ月前に、待ちぼうけを食らった一人だった。

久しぶりに楽しい夕食だった。夕食を終え、御崎夫妻は土砂降りの雨の中、帰っていった。ほろ酔い気分で、風呂に浸かった。残念ながら、豪雨の中、さすが露天風呂には入る気になれなかった。昼頃から激しさを増した雨は、いくら泣いても、涙の泉の枯れることがないように、これだけの水が天のどこに溜まっていたのかと思うほど、一晩中、雨は激しく降り続けた。これ以上降り続けると、この建物の立っている丘の土の全てが流されてしまうのではないかという不安と雨音でほとんど眠れなかった。

翌朝、道は川になっていた。向かいの棟にある風呂場に行くこともできなかった。その日の夕方の飛行機で博多経由で東京へ帰る予定だったが、天草空港まで送ってくれるはずの御崎氏から電話があり、床下浸水で今、避難所にいるという。空港行きのバスも冠水と土砂崩れで運休。やっとのことで空港まで行ってくれるというタクシーを、堀田氏の手配してくれた。が、予約した飛行機には間に合わず、その晩は、本渡に泊まる事にした。

天草ではクレジットカードが一切使えず、手持ちの現金も尽き、熊本で売ったCD代金で、宿代をかるうじて払った。本渡の銀行で、現金を引き出した時は、正直ほっとした。老舗の「松下」で、かまぼこを福島の父母に送った。

案の定、午前中のフライトは、出発直前に降り出した豪雨で、欠航。空港で4時間ほど待たせあげく、無事、豪雨の中、天草空港をプロペラ機が飛び立った時は、ホッと胸をなでおろした。悪夢のように始まった天草への旅だった。けれど、友情は復活したし、結果、行ってよかったと思った。目が覚めると、眼下に、さっきまでの豪雨が嘘のような晴天の下に、東京の町が広がっていた。

家に着いて、福岡の空港で買った博多ラーメンを忘れたことに気がついた。

まあ、ギター共々無事帰れただけでもありがたいものだ。

天草の御崎氏に無事帰宅したことを伝えた。彼は、まだ避難所にいるという。

その数日後電話したときは、浸水の事後処理に終われているとのことだった。天草での集中豪雨を、すでに他人事のように思っている私がいた。

新しいギタリストとの出会い

「若し、僕でお役に立てるのならと思って……」

奥様と一緒に京都の「巴里野郎」のライブを聴きにきてくださった帰りがけに、その男は私の耳元でささやいた。以前、染色家の斉藤洋氏がライブに連れてきてくださったギタリストだった。名前は溝淵仁啓(まさし)。初めてライブに来てくれた日、仕事ははねてから一緒に行きつけの「うすい」で飲んだ。その時、ピアソラの「忘却」という歌が私の声にピッタリだと彼は言った。私も大好きな歌だった。何となく、似た感性の持ち主だとその時思った。

それから、数ヶ月が経ち、練習の為、彼は、京都から東京まで出てきてくれた。横浜でのヴァイオリンとのリハーサルのついでとのことだった。初めて聴く彼のギターの音色は、確実なテクニックに支えられ、しなやかさと光沢をたたえた絹を思わせる気品にあふれていた。柔らかく肌にそうシルクのドレスの感触を思い出させた。私がギターを弾いて歌い出すと、下手くそな私のギターの間間にタイミングよく滑り込んでくる心地よい音たち。お互いの「息づかい」を感じとり、私たちは必死に心の耳を澄ました。それには、まず自分を出してゆかなければならないことを、その時知った。自分を出しつつ、相手の音を、音になるまでの心の揺らぎを感じることを。それは、歌い始めてこのかた経験したことのないメンタリティ

ーにあふれる音作りの仕方だった。久しぶりに私の感性が呼び覚まされた。

それから、3ヶ月後の夏の終わり頃、私たちは、神戸「あいり」ライブ、大阪「帝国ホテルチャペルコンサート」、ホテル阪神でのイベント、山口下松「ギャラリー・華の器」でのミニコンサートと4日間連続のコンサートを組んだ。

神戸「あいり」は、平日そして雨にも拘わらず、ぎゅうぎゅう詰のお客様。帝国ホテルでのチャペルコンサートは早々と完売、キャンセル待ちまで出たという。関西での8ヶ月ぶりのライブだった。関西でのライブの再会を心待ちにしている人たちがいることを知らされたライブだった。ポルトガルギターがなくても、ファドのサウダーデは伝えられる、そう確信した。

決して大きな音を出そうとしない、力みのないたおやかさ、それは、京都という風土が育んだ彼の感性から来ているのではないかとふと思う。

氏の確実なテクニックと音への感性の鋭さ、柔軟さに、心から拍手を送りたい。あとは、お互いの息づかいをどこまで感じ、応えてゆけるか、これからの課題だ。それは、自我と共振、協調との戦いでもあります。もう一度、自分を見つめ直すいい機会でもあります。そんな機会に恵まれたことにも感謝です。

失うということは、また新たな出会いにも繋がるものだと、今さらながら、静かにその事実を受け止めています。

近日発売!

カルロス・ゴンサルヴェス 待望の初インストゥルメンタル録音CD
「ポルトガルギターのエッセンス」(定価2625円)

【収録曲】涙、懐かしのリスボン、ホ長調変奏曲、ロ短調変奏曲、コインブラのパラード、ポルトガルの四月、ロマンス(禁じられた遊び)他



島田、新潟、大阪、東京、鹿児島、名古屋の各コンサート会場にて販売予定です。コンサートにいらっしやれなくて購入ご希望の方は、月田秀子ファド倶楽部まで、11月13日以降、ご一報ください。(コンサート終了までは月田多忙を極めているため対応できないと思いますので)

●ご好評いただいている「汽車は八時に出る」が収録されているCD「ギターに寄せて」在庫が100枚ほどでできました。購入をご希望の方は、郵便振替でお申込みください。

口座番号：00990-6-18440 加入者：月田秀子ファド倶楽部 定価は2000円(送料無料で)です。

毎月会報の「fados cancoes」の欄で、ファドの訳詞を寄せてくださっている「カウド・ヴェルディ」が、アマリア・ロドリゲス詩集「歌いながら人生を」を出版されることになりました。(彩流社、10月20日発売予定。定価2,200円)

出版にあたり、「カウド・ヴェルディ」を代表して清水茂美女史に、その熱い想いのこもった文章を寄せていただきました。ここにご紹介申し上げると共に、是非ご一読されますようお願い申し上げます。

アマリア・ロドリゲス様

安らかにお過ごしでいらっしゃいますか。きっと聖女カルモに守られて穏やかに暮らしのことでしょね。あなたが(あなたと呼ばせて頂いて宜しいですか)1970年の万博の折にいらしたのを皮切りに幾度も歌いにいらした日本から、勇気を出して、初めてお手紙を書かせて頂きます。

2004年7月初旬、久しぶりにリスボンを訪れました。あなたがお生まれになった、パティオ・サントスは、最も古いペナン教区にあるのですね。建物も道も全部石でできている、あの狭いパティオに立ちますと、そこでお生まれになったあなたが、子供の頃、近くの道で遊んだり歌ったりなっていた、かわいらしい姿が思い浮かんで来たものです。夜になると、あの坂道の上にあなたの友達だった月や星が光っていたのですね。お祖母さんの仕込みでアイロンかけもお上手だった。お祖母さんはガミガミとやかましい人でしたが、お祖父さんはあなたの歌が上手なのが自慢で、あなたを歌わせるように誘うのが得意でいらしたなどと、しばらく思い出していました。

そこから、あなたが長年お住みになったサン・ベント街の家へ向かいました。

あの家は成功してこそ住める立派な家ですね。食堂には十人以上が座れる大きなテーブルがありましたし、広い居間の壁の腰から下は白地に青柄のタイルが貼られていました。グランドピアノや、伝統的で落ち着いた家具が置かれていて、サイドボードの上にはあなたが愛していらしたにちがいない品々がそのまま置いてありました。こんなこと申し上げなくても、あなたは良くわかっていらっしゃる。きっと上からご覧になって、「今日は私の家にちょっと戻ってみようかしら。」などとおっしゃっていらっしゃるのではないですか。あそこで、あなたはご家族、親戚、友人、作詞家や作曲家などたくさんの方々とお賑やかに過ごしていらしたのですね。あなたの寝室の方へ足を運びますと、あなたが毎晩寝ていらしたベッドの上に黒っぽくて地味な一冊の本がまっつんと置いてありました。表紙にはあなたの横顔の写真が大きく載っているのが見えます。私の目はその本に吸い寄せられてしまい、心の中で何か動くのを感じました。それが他でもないあなたの詩集Versos Amalia Rodriguesでした。ベッドの上のたった一冊の本、あなたがお書きになった詩集ですもの、あなたの歌声を知る者が引き付けられるのも当たり前とお思いませんか。

幼い頃から歌を歌っていらしたあなたが、歌詞を通して詩の形式を身につけられ、やがてそのお気持ちを詩に或いは歌詞にと表現するようになったのは、ごく自然なことなのかもしれません。お祖母さんが女の子は学問など必要ないと考えていたせい、初等教育を二年半受けただけでいらっしやるあなたは、素晴らしい歌手になられ、あなたの歌声を聞く者にはわかる豊かな感受性をもっていらっしゃる。それが詩を書くという行為に向かわせたのですね。

ヴィートル・バヴァオン・ドス・サントス氏が、たまたま見つけたあなたの詩の数々を、歌詞になった詩と、そうではない詩を更にくっつけて分けて編集して下さったのですね。改めて読んでみて、内容の多彩さに驚きました。ファドを歌うあなたしか知らない者には、今までと違う印象のあなたを発見する思いです。

きっとお一人で「ウッフッフ」と笑みを浮かべながらお作りになったのでしょうと想像されるような楽しい詩も結構ありますね。お幸せなときに書かれたのでしょう。あなたのこういう面を是非日本の皆さんにご紹介したいものです。

でも言葉遊びに徹してお書きになった詩は、韻を踏むことを楽しんでいらっしやるので、日本語にすると、ちょっと困りました。言葉を訳しても単なる言葉の羅列になってしまいますもの。それで日本人の私たちが読んで楽しいと思える風大胆にしてみました。アマリアさんが日本の方だったら、こんな言葉をお使いになったかもしれないと。如何でしょうか。

悲しい詩には二通りあるように思いました。あなたは孤独を感じやすい性格でいらっしやるんですね。幼いときにお母様と別れて祖父母の元に預けられてお育ちになられ、ややスキンシップに欠けていらしたからではないかしら。こんなことを申し上げて、失礼だったら、お許しください。でも孤独の悲しみを繰り返して書いていらっしやるんですね。

もう一通りは、あなたが傷ついて書かれた哀切な詩です。「これらの詩に書いた日付は一切なかった。」ので、あなたがお書きになったときの心境を想像するしかありませんが、それらの多くは1974年のカーネーション革命で政治が大きく変わり、それまでサラザール独裁政権に可愛がられていたあなたが、(私はあなたが愛する歌を心を込めて歌っていらしたの分かっております)、手の平を返すかのように世間から冷たい仕打ちを受けた時期にお書きになったのではないのでしょうか。ご返事を頂けると嬉しいのですが。

「私はもう行ってしまいます。」と、今は天国にいらっしやるアマリアさん、あなたが、「私の詩を日本語にするなんておかしな人たちね。でも少しは私の気持ちを分かっているようだから許してあげるわ。」と、おっしゃって下さいますか。この一年半の間、訳しているときに、いつもこの言葉を念頭に置いて頑張ってきました。まだまだ未熟な私たちですので、世間のご批判を仰ぎたいと考えています。

それにしてもサントス氏は余程あなたに惚れていらっしやるんですね。自伝写真集も自伝も、この詩集も全部彼が手がけられたのですもの。こんなに周りの方を惹きつけられるなんて、流石にアマリア・ロドリゲスさん。

そう云えば、あなたの詩集を日本語にしようなどと目論む私たちのことを、まだご紹介していませんでした。私たちのグループは1990年にポルトガル語の学習グループとして産声を上げ、やがてファドの歌詞の美しさや内容の豊かさに目覚めました。1998年にCaldo Verde(カウド・ヴェルディ)と名づけたのも、あなたが歌っていらした「ポルトガルの家」の歌詞に「一杯の熱いカウド・ヴェルディがあれば幸せ」という言葉からです。それから間もなく、私たちはファディスタの月田秀子さんと出会いました。あなたに出会い、あなたの歌を魂を込めて歌っていらっしやる方です。リスボアでお会いになりましたね。私たちは、彼女がお歌いになる歌の歌詞を日本語の詩にするようになりました。「ファド通信」には1998年から掲載し続けています。メンバーは堀切真木子、柳瀬良子、加登屋美奈子、清水茂美の四人です。

あなたの美しい、あるいは心楽しい、あるいは深い感動を伴う詩の数々が、遂に日本語になりました。どうぞ日本の方々これらの詩を味わって下さり、あなたの心やお人柄の魅力が伝わりますように。私たちがそのことに少しでもお手伝いできれば、とても嬉しく思っています。

そしてこの秋、日本では、月田さんの歌声にカルロス・ゴンサルヴェスさんの演奏、それにあなたの詩集「歌いながら人生を」が重なりました。どうぞ天国から一時お降りになって私たちと一緒に過ごしてください。

2006年10月

カウド・ヴェルディ主宰

清水茂美

＜月田秀子のスケジュール＞

10月19日(木)	千葉・船橋「きららホール」(船橋市民文化創造館) 「よりみちライブ Vol.36」 開演：①18:30～ ②19:30～ (各約20分) ギター：蓮見昭夫 チェロ：竹花加奈子 ♪お仕事帰りのひとときを、無料ライブでお楽しみ下さい。 事前申し込みは必要ありません。	問合せ：tel/047-423-7261
21日(土)	福井「サライ」 *要予約 ギター：蓮見昭夫 チェロ：竹花加奈子	予約・問合せ：tel/0776-27-1204 会費：6,000円 (パーティー込)
22日(日)	富山「明治安田生命ホール」 開場：15:00 開演：15:30 ギター：蓮見昭夫 チェロ：竹花加奈子	問合せ：076-441-0399 (みゃあらく座・真酒亭) チケット：全席指定3,800円
月田秀子ファドコンサートツアー2006 Fantasia de Amalia		問合せ：月田秀子ファド倶楽部 tel/03-3458-9806
11月以降は、ザックコーポレーション tel/03-5474-9999 まで。		
10月29日(日)	静岡・島田「宮美殿」	完売御礼
11月 1日(水)	新潟「だいしホール」	*チケット有
3日(金・祝)	大阪・「中ノ島公会堂」	*当日券有
4日(土)	東京・新橋「ヤクルトホール」	*当日券有
5日(火)	鹿児島「みなみホール」	完売御礼
9日(木)	愛知・名古屋「愛知芸術劇場小ホール」	*チケット有
11月11日(土)	山梨・河口湖「アルカンシェール」 *要予約 パーティー開始：18:00 開演：19:00 ♪当日ご宿泊の方はプラス7,500円(夜食・朝食付)です。 パーティーでは、肉・魚・砂糖・化学調味料を使わず自然の素材をゆっくりとてをかけて調理したマクロビオティックのお料理の数々をお楽しみいただけます。ポルトガルワインもご用意しています。	予約・問合せ：tel/0555-76-6662 fax/0555-76-6682 料金：7,000円(当日7,500円) パーティ&コンサート
18日(土)	長野・小諸「小諸ユースホステル」 開場：18:00/開演：19:00	予約・問合せ：tel/0267-23-5732 チケット前売：3,500円(1ドリンク付)
12月 4日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18:00 ライブ：20:30～(約1時間)	予約・問合せ：tel/03-5738-0125 料金：6,000円(ディナー・ライブチャージ込み)
5日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	
6日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.37」 ♪出演者：蓮見昭夫(ギター) 竹花加奈子(チェロ) 6日(火) fumiko(ヴァイオリン) 7日(水)	予約・問合せ：tel/03-5276-2432
2007年		
1月 8日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18:00 ライブ：20:30～(約1時間)	予約・問合せ：tel/03-5738-0125 料金：6,000円(ディナー・ライブチャージ込み)
9日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel/03-5276-2432
10日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.38」 開場：18:00 ①20:30②21:30③22:30 ♪出演者：蓮見昭夫(ギター) 竹花加奈子(チェロ) 9日(火) fumiko(ヴァイオリン) 10日(水)	ライブチャージ：2,500円(入れ替えなし)

＜編集後記＞

何一つ片付かないまま、時が過ぎてゆく。生き方と同様、時間の使い方が下手なのだろう。あれもこれもと欲張りなのかもしれない。私の一番好きな季節が、パソコンの前で四苦八苦している私を尻目に、優雅な足取りで過ぎて行く。

小諸では、新そば食べて、からまつのじゅうたんを踏みしめながら霧の中、散歩ができるかな？

発送を延期しようと思った会報、何とか、お届けできました。

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

<http://www.fado.jp/>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第51号
- 2006年10月12日発行(季刊：年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒108-0075 東京都港区港南1-8-27 日新ビル1406号
- TEL&FAX 03-3458-9806